

(千葉県 高橋 孝之)

私の戦前戦後の思い出

埼玉県 菊田 鎮 男

私は東京都(前は東京府下東葛飾郡)の東で関東大震災前に農家の四男坊として出生致しました。震災前と言っても生後十カ月でしたので何も記憶はありませんが、当時本所に親戚があり一家全滅したそうです。

村の構成も農家が主で、家々が点在し、ほとんどが田圃、畑、アシ藪で、どこにでもある農村地帯でした。小川には乗っ込み時期ともなると小鮒が群れをなして上ってきたり、時にはボラの大群が、夏にはホタルが雪のように舞い、秋には雀の休憩所であるアシ藪を利用してカスミ網を張り大量捕獲している人もいました。まれには歩兵連隊による払暁戦の訓練が行われる、のどかなところでした。

私の兄弟は男ばかりの五人で、全員が日支事変、大東亜戦争に関係致しました。長男は甲種合格で横須賀銃砲連隊、習志野高射砲連隊へ。次男は甲種合格で横須賀海兵団へ。三男は陸軍工科学校卒業後、登部隊を経て陸軍兵器学校教官で淵野辺へ。四男(筆者)は甲種合格で三重県鈴鹿の第一気象連隊へ。五男は海軍予備学生として卒後南方へと、それぞれの地へ参りましたが、三男のみ残念ながら戦死致しました。

徴兵検査の思い出として、当日朝の開始時間がきても同級生の一人が見えません。気にしていたら一時間ほど遅刻して到着。順次検査に入りましたが、検査種目ごとに担当官より気合をいれられ、一日中気が重かった思い出。帰りに同級生全員で喫茶店に集まり遅刻理由を聞いたところ、朝帰りと分かり皆で大笑いしました。

甲種合格後、徴兵官より希望兵科と希望任地の質問がありました。希望兵科については第一希望 工兵、第二希望 砲兵、第三希望 歩兵と答え、希望任地については上海 辺倒でした。理由は、三男の兄が上海

登部隊にいたからです。

現役入隊通知が届いたら兵科については飛行兵（氣象連隊）。入隊後部隊長（浅野中佐）訓示があり、この部隊は浅野女学校であると言われ戸惑った思い出があります。任地については、一期検閲後、上海にいた部隊に転属した。現地到着前に私が来るのが分かっていたそうです。とてもラッキーでしたが、上海での四カ月が冗貴との最後のお別れでした。

現地転属。名古屋駅で經理下士官三人と合流し彰徳に到着後上海に行った。ここでは、戦爆連合による払暁作戦か離陸していききましたが、帰還機は少なかつた。氣象兵といっても即席のため思うように出来なかつた思い出があります。

次の転進地は大岡飛行場でした。ここでの思い出は黄砂。子供のころに、黄色い砂が飛んでくると、これは大陸の方から飛んでくるんだと聞かされたことを思い出したものです。また、野犬の多いのには驚きました。ある夜、兵舎の営庭で、何か不気味な感じがするのでふと周りを見たら犬の大群が私のすぐ後ろに迫っ

ており、一瞬どうしようかと身の毛がよだつ思いをしました。戊年なのに犬嫌いのためじつと息を詰めていたら、私を中心にして両側に分かれて進んでいきました。その数ざっと数百頭以上。もしあの場で襲われたらと思うとぞっとする恐ろしい体験でした。

敵機襲来で、戦闘機の機銃掃射を数回受けましたが、その都度タコソポに入り退避しました。爆弾も怖いけど機銃掃射も怖いものです。このころは、戦闘機に女性同伴で来襲し、赤いハンカチを振りながら急降下してくるのには参りました。我が軍の迎撃機は見当たらず、偽装機のみで情けない思いでした。

このころ、包頭飛行場より見えるソ連軍戦車隊が、もうもうと砂塵をあげ何か行動しているようだとの情報が入り、何となく嫌な気がしたものです。

天気快晴の日に隼部隊に隼が素通しガラスを破って突進し失神した。獲物を追いかけて失敗したのでしょう。同じ名前なので何となく愛情がわき、気がついた時点で大空へ帰したことは当然です。

次の転進地は定かな情報ではないが九州雁ノ巣との

こと。大連にて待機していましたが、大連港を出ると爆沈されるので何もせぬまま数カ月が過ぎ、周水子飛行場を後にしました。

次は遼寧省金県飛行場へ転進。ここでは何があつたのかほとんど記憶がありません、約一カ月の駐屯でした。

次の転進地、遼寧省熊岳城飛行場には終戦まで三・五カ月の間、飛行場より約一キロメートルくらい離れたところに被服倉庫があり、責任者として毎日徒歩で往復していました。八月十五日の十時頃でしたか、本隊より連絡があり至急帰れとのこと、とにかく町中を通って帰隊したら終戦とのこと、驚きとともにどうなるのか気になりました。

ここは保養地らしく温泉が豊富だったことを覚えています。近くにリンゴ園がたくさんあり、日本人渡満者の方々が生産されていたのでしょう。終戦までは静かな町でしたが、二、三日すると騒々しくなりました。ソ連軍の乗った列車が駅に到着すると町は略奪、婦女暴行と阿鼻叫喚となり、耳を覆ったことを覚えて

います。このとき第一回の屈辱を味わいました。このころ上層部では、陸路朝鮮へ行くか、おとなしく捕虜になるか、検討されたそうです。ソ軍の南下状況や満人の動向から見ても、ここは素直に捕虜になった方がよいとの結論だったとのことと捕虜になりました。その一方でわが隊にも現地召集者や中国語の達人などが数人おり、変装して現地離隊されました。生還されたかどうかは定かではありません。

また、同胞の家が集団で次々襲われ、略奪暴行が始まったと聞きました。私の通った被服倉庫も大勢の満人が「マイマイ」と言っていました。私がいる間は略奪行為はありませんでした。一人で町中を通って往復しました。

そうこうしているうちにソ連軍による武装解除が始まり、兵器類を貨車に積み込み風光明媚な熊岳城を去りました。

八月の終わり頃列車にて北の方向に、私にはどこに行くのか皆自分からいまま、下車した所は蓋平という駅でした。ものすごくくさい臭いのする……沢

庵工場だそうで、これも同胞の方達が経営されていたのでしょう。ここもかなり荒らされた模様でした。ここでは特にやることもなく、身体が鈍る思いでした。かれこれ一カ月くらいでしょうか、またまた移動で、列車に乗り小一時間で下車し、たしか海城の駅だと思いますが、ここではいよいよ將校と下士官兵に分かれることになりました。

気候もだんだん涼しくなり、気をもんでいるうちに長い長い列車に荷物のように乗せられ北に向かいました。情報では帰国するはずがどんどん列車は北方向。不安のうち四平街にて広軌列車に乗換え、機関車前面にはスターリンの肖像画がついており、乗り換えた時点で帰国ではないと決心しました。

走行中度々停車するので逃亡者が多く見受けられ、よく銃声がしていました。ソ満国境手前では四、五人、皆が見ている前で銃殺されましたが、ソ連領に入った頃はかなりの逃亡者がいたのではと思います。

後で聞いた話ですが、海城では千六百人乗車したのに八百人に減っていたそうです。皆、無事に帰国され

たんでしょうか。特に大連と満州にいた警察官が多かったようです。家族の方が心配だったんでしょう。

約二週間かけてやっと着いた所がチタ市西二十キロの所にある炭坑の街チネルノフスカヤだそうで、丘がたくさんあり、そこに半地下の收容所があり、未完の宿舎もあり、先着の兵士が造ったものでしょう。ノロノロ運転の理由が分かりました。

下車地から宿舎まで徒歩で三キロくらいあったか、道かどうか分からない所を行軍しました。その行軍は寒さと滑りでお爺さんの隊列のようでした。これを見たスケート靴をはいた子供達に、身につけた小物類（防寒手袋、鞆など）をカミソリで切り取られました。やっと到着した時、のどが渇き水を探したがないので飯盒の蓋で雪をすくい、その場で口につけたら唇に吸いつき、引っ張っても取れないので往生し、一つ勉強になりました。

一夜明けた朝、点呼だと称し、色々な方法（日本式二列、十人ずつ横一列で手をつなぐ）で員数合わせをしたが、結局何回やっても合わないので止めてしま

ました。その後帰るまで員数検査はありませんでした。これくらい員の員数なら日本人なら誰でも出来ることとささやいたことを覚えています。

全員ダモイだから荷物を持って外に出るとのことです。喜び勇んで外に出たら、今度は荷物はそのままで一人ずつ中に入り女医による身体検査が始まり、表に置いてきた荷物は全部没収されてしまいました。出世したのは赤ふんだけで、たちまち取り上げられ頭に巻かれました。板張り上に毛布一枚では寒くて眠れない、夜になると警察官だった方があちこちで泣いていました。私などは若いし独身ですから泣くことはありませんでしたが、本当に気の毒でした。

到着後何日か、政治局員でしょうか、七人くらいが机に横並びとなり、一人ずつ呼ばれ尋問されました。私は三回にわたり呼び出されました。捕虜番号、姓名、年齢、出身地、入隊前の職業。特に職業についてしつこく尋問され、私は家が農家でしたので、躊躇することなく農業と答えました。すると片言の日本語で、「お前は嘘をついている」と言われ、地面を指差

して、「嘘が判ればお前はこの中だ」と言われましたが、私は臆することなく農業と言いました。

このようなやりとりが三回ほどあった。その結果かどうか分からないですが、炭坑作業につきました。

炭坑は三交代制で、私は二番方の午後四時から午前零時の組でした。作業が終了してもソ連兵の歩哨がない時があり、時には小一時間も待たされたこともありました。初めの頃はわからなかったが、山陰より女性と二人で出てくるのを見てなんとなく気付きました。炭坑の道すがら馬糞が落ちてるのを見てジャガイモと思うなんて、今では笑いものです。

収容後数日たった頃でしょうか、片言の日本語でソ同盟は農民も軍人も労働者も皆平等であることを再三再四聞かされましたが、ちょっと違うと思いました。労働者の家は、食器はさびた空き缶で代用、靴下は布切れを足に巻いていました。ある日少佐の家に行ったところ、肉、砂糖など、どちらかという物が豊富であったように思いました。

ラーゲルの食事は一日二食で、マッチ箱二つ分くら

いの黒パン一個に満州から持ってきた馬鈴薯（水が貴重品のため洗う事ができず泥水）のスープのため、どんどんやせ衰えていきました。半年もすると、ほとんどの人が後ろから見ると肛門が丸見えで最悪の状態でした。また、空腹のため、フスマを丸めて焼いて食べ、たため便秘となり苦しんだこと。鼠を捕まえてベチカで焼き、食したことも。アカザのひたしなど、人間いざとなると何でも食べるものだと思います。今ではとても考えられません。

炭坑ノルマは、爆破された石炭の積み込みで、一人八時間労働で八トンでした。最初は大きな石炭を組み合わせ、トロッコに山盛りとしましたが、地上に行くまでに積載量が半分になり、五十トン貨車に五十台のトロッコで済むところ百台要ることで上から文句が出、たちまちばれたことがありました。坑内でトロッコが脱線しても栄養失調ではレールに乗せることが出来ず、ソ連人から見ると手抜きに見えるのでしょうか。また、坑内では煙草をまきあげることを覚え、これがまたよく成功した事を覚えています。

毎月末に今月のハラシヨラポーターとして、カマンジュールから、幸か不幸か、上位者が（たしか二十人程度だと記憶していますか定かではありません）毎月読み上げられました。ニイハラシヨラポーターがどのような処置をされたのかは定かではありません。

着衣については最初から着けていたものでダモイまで過ごし、支給は一度もありませんでした。長い習慣でしようか、パンツをはかないことと風呂に入れないことで、人間は垢がたまっても死ぬことはないと思えました。

穴を掘って板を渡し何十人の人が大使をしている姿は壮観と言うべきか、次第に凍りついて盛り上がり、実に実に……。

チタには一年七カ月いましたが、その間毎日働き、休日などはありませんでした。宿舎は板張りの半地下で、採光など全然考えないものでした。倉庫と言った方が適当と思う。

時期は忘れましたが、一人が逃亡し、民家に押し入りソ連軍に捕まり銃殺されたものと思うが、その後が

悲惨でした。全員集まれとのことで集合した所に馬にまたがったソ連兵が、逃亡者を逆さに、足を馬の尻尾の所に結び、顔は地面に擦りながら早駆けの状態に到着、顔はザクロのようでした。その同胞の前で、お前達も逃亡するところなると言われました。

人間の精神力はすごいものと自分自身で実感しました。栄養失調で階段を普通に上れないので、両手で一方の足を上げ、終わったらまた一方の足と、交互にやりながら上ったり、兵隊と兵隊が接触すると両方倒れてしまうなど、炭坑への往復路はふらふらだが、一旦坑内に入るとまるで別人のようになります。ノルマの八トン積み込みしたり、落盤に際しても逃げ足の速いこと、坑内というところは不思議な所です。人間、生に闘ってはすごい力が発揮されるものです。

若かったこともありましたが、余りダモイに執着すると良くないかなと思ひ、ソ連のことだから四五年は覚悟していました。それがよい結果につながったのでしょうか。昭和二十二年五月中頃と思います。夜中に作業を終え、午前一時三十分頃就寝していたら、午

前四時頃ソ軍将校が来て、今から名前を呼ぶから呼ばれた者は午前五時迄に入浴、散髪をして衛兵所前に集合するように言われ、半信半疑でしたが、眠い目をこすりながら、まあ入浴、散髪が出来ればいいかなと軽い気持ちで午前五時に衛兵所前に行きました。トラックが二台来ており、過去に何回もだまされているので、あるいは伐採作業かなと一瞬いやな予感がしました。トラックが幾つもの丘を越え、数時間後に森林生い茂る中に入りトラックはやつと止まりました。これは間違いなく伐採作業で日本には帰れないと覚悟を決めました。

ここではラーゲルの宿舎より上等な建物で給与もよく、かつNO作業でした。後で判ったことですが、ダモイ前に幾らか体力回復させるためだったようです。約十日間くらいいたでしょうか、ナホトカに向かうと聞かされましたが、まだ信じられません。列車に乗り、数日で昭和十八年以来四年ぶりに見る海が見えた時には、何となく感動したことを覚えています。ナホトカでは一日ごとに兵舎がかわらないと日本からの帰

還船に乗船出来ないと言われ、一人でも反動的な人がいると帰還予定者全員ダメイできないそうで、ナホトカの周辺でも肉眼で見える所に残留させられた方々が作業しているのが見えました。

いよいよ乗船の日、ナホトカ港に行っても一向に日本の船が見えません。すごい豪華船を通り過ぎて一番奥に見えた錆だらけで日章旗が汚れたこの船で日本海が渡れるのか心配したものでした。乗船後岸壁を離れてもまだ信用できませんでした。乗船中に片山内閣の誕生が船内ニュースで流れていました。航行中に甲板に出て広く青黒い海面を見ていると海に吸い込まれるような気がしました。船内では何を支給されたのか、乾パン以外は覚えていません。ただ、船員から、内地は食料が不足していると聞かされました。

出港して二日か三日後の朝、舞鶴港に到着。山々に農家の方が働いている姿を見たときは感激しました。船内は混乱もなく小船に分乗して待ちに待った陸地に上陸できました。白い割烹着を着た婦人会の方々、幟を立てて肉親の手掛かりを求めて一生懸命の方の中

で、我々は皆疲れて愛想を振りまく余裕はなかったのですが、迎える方々は、皆洗脳されたんじゃないかととても奇異に感じられたらしいです。笑い顔は誰一人いませんでしたから。

ここでびっくりしたのは、いきなりDDTの頭からの散布と消毒液の入った風呂でした（風呂は二年ぶり）。その後青い畳の上に横になったときは浦島太郎の心境でした。落ちていたので家に電報を打とうと思ったら、到着まで約一週間かかるとのこと。順調ならば四日に家に到着することと電報は取り止めました。各地方ごとに列車に乗り舞鶴を後にしました。ここで驚いたことに三百円の支給があり、瞬間、敗戦してもこんなに支給されるのかと、日本はすごいなと思いました。いかに貨幣価値が判らなかつたか。京都に着くまでに文無しでした。鉄道だけは復員者として確保されていたから無事家に到着することはできました。

到着日は今でも覚えています。昭和二十二年六月十四日午前十一時でした。ちょうど田植え時期で、母親

が孫を背負って庭におり、やせこけた私を見て、目を丸くして、「鎮か？」と確認されたことを覚えていません。あのときは幽霊かと思ったと母親が言っていました。

家の者が農作業に出た後よく食べました。栄養失調は一編に多く食べるとよくないから少しずつ食べるように親から言われましたが、本当によく食べました。別人のように太り心配されました。

ある程度体力が回復した頃、四年半ぶりに復員挨拶に会社に行ったところ、何となく感じたものがあった。それでも面会してくれました。幸いな事に入隊のため休職したときの工場長が専務に昇進していき、色々心配していたそうです。それは、今度シベリアから大物が帰ってくると宣伝した者がおり、その大物が私だったわけです。数カ月にわたり付きままとわれ往生しました。今考えると大変な大物です。

戦後のページも朝鮮戦争と共に終わり、好況へと進み、戦後二年の出遅れでしたが、それなりに昇進し、無事定年を迎えることができました。

今では軽い運動のほかボランティア活動に余暇を充しんでおります。

【執筆者の紹介】

出生地 東京都葛飾区

生年月日 大正十一年十月二十五日

昭和十七年七月十七日 本郷連隊区において徴兵検査を受け、甲種合格

昭和十八年四月十日 三重県鈴鹿の第一氣象連隊に飛行兵として現役入隊

昭和十八年～二十年 第一氣象連隊における一期検閲
後上海・彰徳・大同・周水・金
県・熊岳城と転進

昭和二十年八月十五日 終戦（熊岳城において武装解除）

十月二十日頃 チタ市チェルノフスカヤ
（炭鉱の町）に到着

昭和二十二年五月中旬 帰国のため同地を出発する迄、炭坑作業（主に貨車積

込)に従事

六月十日 復員(引揚船米山丸 六月九

日舞鶴入港)

六月十四日 自宅到着 静養

八月一日 復職

昭和五十九年十月に退職してからは、地域住民の健康・福祉・親睦の発展のため、精力的にボランティア活動をこなし、各種団体委員等に参画、多忙な日々を送っておられ地域住民の信望を集めておられる。

(埼玉県 饗庭 秀男)

抑留記

埼玉県 山口 秀夫

大正十二年三月二十九日、大連市(当時関東州、現中国東北地方)にて出生。

昭和十九年晩春、家に帰ると「召集令状」と共に大連兵事部に出頭せよとのことで、翌日早速、大連兵事

部に出頭した。兵事部の人事係の准尉が出て来て「今回の召集は臨時召集で三カ月すれば帰れるのでしっかり軍務に励んで来い。ちなみに今回の召集は秘密召集なので知人や親兄弟にも知らせてはいけない。ただし勤務先の会社等には知らさない訳にはいかんだろう」との事であった。しかしながら家の者に知らさない訳にはいかないので母にその旨を話したところ、「お前の父も兄も軍隊に行っていないので、お前はお国のためにしっかり働いてきなさい」と言われた。もちろん召集令状を受け取ったのは母だから秘密も何もあるはずがないのだが。

さて、翌日は殊勝にも大連神社にお参りし「立派な兵隊になれるように」とお祈りした。家では家族と親類二、三人が集まり壮行会のまねごとをした。

出発は当時の大連駅の裏口にあった旧駅に集合することになっていたので、母が見送りに来てくれたが、駅の手前に憲兵が立っていて見送る人は皆そこで帰された。

汽車は特別列車で、皆召集兵ばかりであった。その